

幼児期における領域「表現」の「奏でること」に関する一考察

— 保育所での実践から —

A study of “playing on sounds in childhood” in the area of “expression”
A practice at the nurseries

原 友美

愛知県立大学教育福祉学部 (非常勤)

Tomomi Hara

Education and Welfare, Aichi Prefectural University (Part-Time)

Abstract

Listening various sounds in their daily life, children are encouraged to make handmade instruments using personal belongings. They began to communicate each other listening to the other's sounds. The author tried to select teaching materials suitable for those instruments.

For children, it is important to enjoy playing instruments before performing instrumental ensemble at the nursery. They began to understand the timbre as well as the name of the instruments. When playing the musical tunes, an arrangement of the appropriate instruments is a must. These tunes such as [Amefuri] [Tanabata] [Aiai] were chosen for the performance.

The author was surprised to listen to an excellent performance of [Hungarian Dances, No.5] by children at Christmas concert of a nursery. It is advisable for children to select the classical music with a contrast such as strong parts as well as quite ones. Teacher's accompaniment and conduct are necessary.

In conclusion, good communications via musical sounds make the children perform good instrumental ensemble at the nurseries.

キーワード：表現，幼児期，音に関わる遊び，コミュニケーション

Keyword : expression, childhood, playing on sounds, communications

はじめに

筆者は平成 18 年から 1 年間、名古屋市内 I 保育所で ASD (Autism Spectrum Disorder) の年長男児の支援に当たりながら、他の子どもとも楽器遊び等を行った。平成 19 年から 1 年間は名古屋市内 W 保育所で特別な支援を必要とする子どもたちと園内のプールで水遊びや公園での外遊び等を共にした。同時に年中・年長児を対象としたわらべうたの実践、ごっこ遊び、生活発表会等も見せていただいた。外遊びに出かけた際、特別な支援を必要とする子どもたちが、石を叩いて互いに音を聴きながらコミュニケーションしていたが、楽器を手にする前に、このように身近な音を聴き合う活動が必要ではないかと思われた。

平成 22 年度から毎年、名古屋市内 E 保育所のクリスマス音楽会に伺った。演奏曲目は、幼児歌曲以外では「あまちゃんのオープニング曲」、「宇宙戦艦ヤマト」、エルガー作曲「威風堂々」、ドヴォルザーク作曲「交響曲第 9 番「新世界」第 4 楽章」等であった。子どもたちの演奏はいつも実に素晴らしく、なぜこのように素晴らしいのか、選曲、楽器の選択、指導方法等の分析が必要と思われる。

筆者は、このように、たびたび保育現場に伺い、軽度発達障害の子どもたちの支援も含めて「自由遊び」の時間に音に関わるいろいろな遊びをしたり、クリスマス音楽会を共に楽しんだ。子どもたちとのふれ合いの中で学んだこと、理解されたこと等を本論文では「奏

でること」に限定して明らかにしてみたい。

奏でることは、それ以前に音に関わる遊びが大切と思われる。幼児の音に関わる遊びは2つに大別される。1つは身の回りの物や廃材を使った「音遊び」で、これらを使って筆者が楽器作りを実践しているものにひょうたんマラカス、ペットボトルマラカス、ストロー笛、一弦箱等がある。

もう1つは、保育所にある楽器を使つての「楽器遊び」である。子どもたちは、楽器遊びから始めて順次、幼児歌曲、アニメソング、クラシック等まで幅広く演奏するようになる。

本論文では1. 楽器作り (1) 音遊びの実際 (2) 手づくり楽器が生かせる教材 2. 保育所にある楽器を使用して (1) 楽器遊び (2) 幼児歌曲を演奏する (3) クラシック音楽を演奏する 以上について考察する。

1. 楽器作り

文部科学省『幼稚園教育要領』（平成20年版）第2章 領域「表現」の「内容」には「生活の中でさまざまな音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり感じたりする」等^{注1}と書かれている。身近にある空き缶、空き箱、ペットボトル等、ゴミとして処分されるものであっても、「こんな工夫をしたらこんな音が出た」「じっくり聴くとまるで〇〇のよう」等、「音を聴くこと」「音を創り出すこと」によって音楽の表現力が養われる。

楽器作りでよく使われる音の仕組みとして①太鼓のように叩いて音を出す。②バイオリンのように弦を弾いて音を出す。③マラカスのように振って音を出す。④ギロのように擦って音を出す。これら4つに分類される^{注2}と思われるが、筆者が楽器作りを試みたのは①②③である。

(1) 音遊びの実際

① 石を使用して

手のひらに石を載せ、それを小さめの石で叩きながら歩く。出会った友だちに自分の名前を言い、お友達の名前も聞く。お互い石を叩いてコミュニケーションをする。次いで別の友だちと同じように始める。この遊びでは、石は大きさ、形、叩き方によって、さまざまな音色が出ることを子どもたちは発見する。互いに名前を知らない友だちがいればこの機会に知ることができるし、石を使ってコミュニケーションすることで、「あの子と話すのは苦手」という苦手意識も少しは軽減されると思われる。

② 空き箱と輪ゴムを使用して（一弦箱）

子どもたちの家にある牛乳パックやお菓子の箱に輪

ゴムを通して一弦箱を作る。通したゴムを指で弾くと音が出るが、ゴムの太さや弾く場所によって音の高低、音色が違うことに子どもたちは気づく。「自分が作り出した音を友だちに聴いてほしい」、「友だちのつけた音を聴いてみたい」と思っているようで、日常的に、あまり会話が聞かれない友だち同士でも、この楽器作りでは音を媒介としたコミュニケーションを生みだしていると言える。^{注3}

(2) 手作り楽器が生かせる教材

① 歌唱教材に手づくりマラカスを取り入れて

ペットボトルは身近にあるものであり、中身を出し入れしやすい。筆者が用意したおはじき、あずき、楊枝を半分に折ったものの中から好きなものを、量を調整しながらペットボトルに入れて自分のマラカスを作った。中に入れるものの材質や量を変化させる過程で音色も変わることを、子どもたちは発見する。

ペットボトルマラカスや賞状を入れておく筒の蓋を取った時に出るポンという音を生かせる教材として「南の島のハメハメハ大王」を選んだ。その理由は、この歌の3番にはハメハメハ大王の子どもが登場し、「風が吹いたら学校を遅刻、雨が降ったらお休み・・・」という歌詞に対して「そんなのダメだね」と子どもたちは言いながら、のんびりとした大王の子どもにどこか心を魅かされているからである。また、曲の中で何回も繰り返される「ハメハメハ」とペットボトルマラカスの音、筒の蓋を取る「ポン」という音が共調し、南の島の雰囲気が醸し出され、この教材が適していると感じた。子どもたちの中に南の島のイメージが膨らみつつあるのか、身体を左右に揺らしながら奏でたり歌ったりしていた。

② 民謡に手作り太鼓を取り入れて

保育所の夏祭りや運動会では、はっぴを着て力強く和太鼓を演奏する子どもたちの笑顔にしばしば出会う。和太鼓ほどの力強い音は出ないとしても、「自分の楽器で練習できる喜び」のために太鼓作りを試みた。作り方は簡単で、B4判～A4判ぐらいの大きさの空き箱をラップの芯2本で叩いて音を出す。

筆者は4、5歳児に山形県の民謡「花笠音頭」に手づくり太鼓でリズムを叩くことを試みた。たいへん華やかな「花笠音頭」を、まず写真等で見てから提示された比較的簡単なリズムパターンを子どもたちは叩いた。(図1)

打ち方

ドン ドン ドン ド ドン コ ドン

♪ ♪ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫

右 左 右 右 左 左 右

図 1

楽器作りの過程で見られたように「自分の音を創り出す」「自分で創りだした音を聴いてみる」という活動や「友だちの音も聴いてみたい」との思いからは、表現力の芽生えや聴くことの育ちが感じられた。これらは、歌うこと、演奏することの土台となる表現力、音楽的能力の育成に繋がると思われる。

次に保育所にある楽器を使った活動について論ずるが、これらは手作り楽器を使った豊かな音楽活動を経て始められることが望ましい。

2. 保育所にある楽器を使用して

楽器遊びおよび演奏を考えた場合、教材は子どもが興味や関心を持つものでなければいけない。子どもたちが「わー音がきれい」と感じたり、思わず身体を動かし楽器を打ちたくなることは表現の原点であると思われ、そんな教材が望ましい。低年齢の子どもを対象に、日頃実践している「楽器遊び」を2例挙げる。

(1) 楽器遊び

① 「器楽合奏はこうして始める」

4色の靴下を使った楽器遊びである。赤の靴下の片方にカスタネット、ピンク色の靴下の片方にタンバリン、黄色の靴下の片方に鈴、青色の靴下の片方にトライアングルを、子どもたちのよく見える位置に置く。子どもたちには4つの楽器のいずれかを渡す。そして、大人の両手両足にもう一方の靴下をはめる。(4箇所どこに何色の靴下をはめるかは自由)たとえば、大人が黄色の靴下を動かした時には鈴を持っている子どもたちが鈴を鳴らし、青色の靴下を動かした時にはトライアングルを持っている子どもたちがトライアングルを鳴らす。赤とピンクが同時に動いたり、手と足を伸ばして4つの靴下が動いたりする。次に、この大人の役割を子どもたちが順番に行う。前に出てきて、ゆっくり手足を動かす子ども、「皆できる?」と言って、ものすごいスピードで手足を動かしたりジャンプしたりしてヒーローぶりをアピールする子ども、それを見ている子どもたちの反応は「道路で旗を振っている人みたい」「スケートの羽生君みたい」等々。この楽器遊びでは、子どもたちは「どの靴下が動くかな」とわくわくしながら見入ったり楽器の重なる音色を聴き入ったりしている。

② 「お誕生月なかま」(楽譜1)

お誕生月なかま

奥野 正恭/作詞・作曲
前田 仁美/編曲

(軽快にはずんで)

楽譜 1

「お誕生月なかま」という曲の楽器遊びである。

子どもたちは円になり、その中央に色々な楽器を並べておく。誕生月以外の子どもたちがピアノに合わせて歌い、誕生月の子どもは円の真ん中に出てきて好きな楽器を好きなように鳴らし最後はポーズ。

これら2つの楽器遊びは参加している子どもたち全員に必ず出番がある。自由に身体を動かし楽譜に左右されることなく好きな楽器を手にし、創造的に奏でることができ、どの子どももヒーローになれる。また、音色を友だち同士聴き合うこともでき、表現力が育てられると思われる。

(2) 幼児歌曲を演奏する

子どもが手にとって容易に音が出せる打楽器で、保育現場でも比較的良好に耳にするのはカステネット、鈴、タンバリン等々である。季節や行事に関するおおかたの歌唱教材が器楽教材になり得ると思われるが、曲想に合った楽器選びをすることが大切である。また、奏でる楽器がうるさくならないように楽器の種類、数等編成が重要である。

平成18年に1保育所で年長児に実践した2例を挙げる。「七夕」では、子どもたちが短冊に願いを込めて笹につるし、上記の3つの打楽器ではなく、ピアノの伴奏でツリーチャイムのみを使って笹の葉が擦れ合う音を表現した。また、「雨ふり」を歌う際に小さな太鼓を用意し、実際の雨の音を聴きながら一人ひとりに太鼓を使って雨の音を表現してもらった。手をいっぱい広げて大きな音を出す子ども、小さな音で細かく叩く子ども等さまざまで、保育者と子どもたちとの間には、雨をイメージしながら音楽的コミュニケーションが生まれた。

そもそも幼児歌曲には太鼓は、やや重い感じがして取り入れられていないことも多いが、次の曲「アイアイ」(楽譜2)の合奏では、太鼓が大切な役割を果たしていると言える。はじめの「アイアイ」は太鼓でどっしりとおさるさんの登場を表し、次の「アイアイ」はカステネットで軽く弾むように繰り返し、このかけ合いが実に楽しい。そして、鈴でおさるさんのひょうきんさが表現され、思わず身体を動かしたくなる曲だと思われる。

アイアイ

相田裕美 作詞 宇野誠一郎 作曲

The musical score for 'アイアイ' consists of four systems. Each system has a vocal line and a castanet accompaniment line. The castanet part is marked with 'mf' and '(カステネット) (たいこ)'. The lyrics are: '1.2 アイアイ (アイアイ) アイアイ (アイアイ) おさるさんだよ', 'アイアイ (アイアイ) アイアイ (アイアイ) みんなのしまーの', 'アイアイ (アイアイ) アイアイ (アイアイ) しっぽのながい', and 'アイアイ (アイアイ) アイアイ (アイアイ) おさるさんだよ'. There are 'すず' (bell) markings in the castanet parts corresponding to the lyrics.

(3) クラシック音楽を演奏する

平成 25 年 12 月に E 保育園のクリスマス音楽会で聴き、感動したクラシック音楽の曲目は、チャイコフスキー作曲「バレエ組曲 くるみ割り人形」から「金平糖の精の踊り」、ブラームス作曲「ハンガリー舞曲 第 5 番」であった。この 2 曲について演奏の分析を行い、楽器の編成等について考察する。

① 「金平糖の精の踊り」

年長児 14 名の演奏である。メロディーは、E 保育所の音楽講師による電子ピアノの演奏と鉄琴を担当する 2 人の子どもが奏でる。その他の子どもたちは音の違ったハンドベルを 2 本ずつ持ち、小節のはじめに和音として奏でる。これらの和音の響きは、クリスマス

の真夜中、金平糖の精が兵士の姿をしたくるみ割り人形と踊る、ちょっと愛らしくちょっと不思議な雰囲気のみごとに醸し出し表現していると言える。また寂の部分では、ハンドベル担当の子どものうち 3 人が鈴に持ち替えてトレモロ奏法で鳴らす。ツリーチャイム、ハンドベルも加えて演奏される。

若干指導法にふれると、子どもたちはハンドベルを演奏する順番に並んでいるので、保育者は観客の邪魔にならないように床に座って一人ひとり順番に顔を見ながら指示を出し、待っている子どもたちは「次は自分の番だ」とわかるようになっている。

② 「ハンガリー舞曲第 5 番」(楽譜 3)

「ハンガリー舞曲」第 5 番 作曲 : Johannes Brahms

楽譜 3

演奏は「金平糖の精の踊り」と同じメンバーである。楽器の編成は、大太鼓 1、小太鼓 2、シンバル 2、タンバリン 4、トライアングル 2、カスタネット 3、鉄琴 2、音楽講師による電子ピアノ。

1 小節目から大太鼓、小太鼓、シンバルを担当している子どもたちは、力強く拍を打ち、リズムによって演奏できているので曲が非常に引き締まって聴こえた。楽譜の 25 小節目(繰り返しは省く)から 4 小節(meno

mosso) は、以前とは対比的にトライアングルで少しゆったりと艶っぽく。その後は、また力強く。39 小節目から 2 小節(meno mosso) はトライアングルと鉄琴。その後の 2 小節はカスタネットで軽く切っていく感じ。この曲も保育者による指揮がなされている。

これら 2 曲から楽器の編成について考えられることは、曲全体で力強く盛り上げるところは全楽器による演奏にし、それとは対比的に寂の部分や meno mosso

等があるところは、演奏する人数も少なくし楽器の音色も変える。そうすることで、どちらも生き生きすると思われる。この保育所では毎週リトミックという授業があって、楽器にふれる音楽活動がたくさんなされている。その土台の上に年一回のクリスマス音楽会があり、練習も保育者指導型ではなく、皆で話し合っただけで練習が行われている。CDではなく保育者が電子ピアノを演奏することにより、子どもたちの演奏も同時に聴くことができ、曲に適したテンポ、雰囲気を変えながら微調整もできる。すごくテンポの早い曲を選ばなければ、クラシック音楽も保育の現場で、ぜひ挑戦してほしいと願っている。

「奏でること」のまとめ

生活の中でのさまざまな音に耳を傾け、身の回りのものを用いて音を工夫し、手作り楽器の作成を試みた。手作り楽器を友だち同士聴き合う場面も見られ、音を媒介としてコミュニケーションが生まれていた。さらに、手作り楽器の音色が生かせる教材も考案した。

また、保育所での器楽合奏の際には、前段階として皆で楽しめるような「楽器遊び」が大切である。たくさん遊んで、子どもたちが音を聴き合う中で楽器の名前・音色がわかるようになる。歌唱教材を演奏する場合は、奏でる楽器がうるさくなく、曲想に合った楽器の編成が重要である。日々の実践例として「雨ふり」「七夕」「アイアイ」を取り上げた。前述したように子どもたちにはクラシックにも、ぜひ挑戦してほしいと思い、力強い部分、静かな部分等、コントラストがはっきりしている曲を選ぶことが望ましいと考える。その場合、保育者の伴奏、指揮は欠かせない。保育所での日々の生活の中で音を媒介としたコミュニケーションがあってこそ、素晴らしい表現、器楽合奏がありえると言える。

おわりに

「このように奏でなさい」ではなく、幼児期には、子どもたちの「奏でたい」という気持ちを大切に「奏でること」の感動を伝え合うことが大切と思われる。次号では保育所での実践から「歌うこと」について考察し、領域「表現」の課題について明らかにしたい。

注

- 1 文部科学省『幼稚園教育要領』（平成20年版）
チャイルド社 平成26年 39頁
- 2 香曾我部 琢「手作り楽器の例」 『実践しながら
学ぶ子どもの音楽表現』 石井玲子編著
明治図書 平成21年 99頁
- 3 『楽器づくりによる想像力の教育 —理論と実践—』小
島律子、関西音楽教育実践学研究会著 黎明書房
平成25年 75頁～77頁

参考文献

- 『子どもを音楽好きにする! 楽器遊び ベスト40』
熊木真見子著 明治図書 平成21年